慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	読書レディネスに関する研究(報告一) : 歴史的展望と今後の課題
Sub Title	Studies on reading readiness : report I : a historical survey in relation to possible approaches
Author	安岡, 龍太(Yasuoka, Ryuta)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1966
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.7 (1966.) ,p.67- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000007-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

読書レディネスに関する研究（報告一）

Studies on Reading Readiness: Report I

——歴史的展望と今後の課題——

——A Historical Survey in Relation to Possible Approaches——

安　岡　龍　太

Ryuta Yasuoka

目　次

Ⅰ　緒　言
Ⅱ　レディネス一般
Ⅲ　読書レディネス
Ⅳ　読書レディネス評価の問題
Ⅴ　読書レディネスと早期の読書指導
Ⅵ　読書レディネス研究の問題点と研究方向
Ⅶ　結　語
Ⅷ　文　献

Ⅰ. 緒　言

西洋の諺に，『馬を水辺のところまで連れてくることができても，水を飲ませることはできない』というのがあるが，これは正に学習のためのレディネスを示唆するものである。この概念は近年になって教育理論の中で注目され，教育心理学はこの概念を実証的に考察するに至った[13]。特に J. S. Bruner が教育の現代化の時代的要請に基づき，1960年にその著『教育過程』の中で，学習のためのレディネスに関する一つの仮説『どんな教科でも，知的性格をそのままにして，どんな発達段階のどの児童にも効果的に教えることができる』ことを提唱し，レディネスは作りだせるものであって，自然発生的に熟する時期を待つ必要のないことを強調した[7]。従来，児童中心主義は，児童の知的能力を過小評価したのに対して，知的早期教育は，既成の教育内容をそのままの形で年少の児童に与えて，彼等を犠牲にしてきたようである。この間の事情は，J. S. Bruner からのつぎの引用に明らかである。『子どもを大人の犠牲に供するのが誤りであると同じように，大人を子どもの犠牲に供するのも誤りである。生活教育がいつも児童の興味に合致すると考えるのは，センチメンタリズムにすぎない。それは児童に成人社会のやりかたを口まねさせるが，空虚な形式主義であるのと何ら選ぶところがない。興味というものは，創りだすことも，刺激して伸ばすこともできるのだ』[18]。

このような主張にも拘らず，又現代社会は変化をかさねているにも拘らず，概して幼児教育のプログラムは30年，否50年以前のそれと殆んど変化がなく，幼稚園は伝統主義の最後の要塞となっている[91]。読み方教育についてみれば，これは幼稚園では行われず，小学校に入ると行われるのが通例である。これは系統的な読書開始の時期について，今から35年前に Morphett 等の提唱した $6^1/_2$ 才説の強い影響によるためであろう[68]。

それにも拘らず，最近では，幼児にも読む力が潜在的にあることが認識され，例えば，Denver の公立学校や Whitby では幼児に読書指導 (reading instruction) を行い，Glenview の学校では 1963 年から幼稚園における前読書技能 (pre-reading skills) のプログラムの効果を判定するための5か年研究が始められた。一方では，このような実践及び研究から，他方は米大統領Johnson の4才就学論や中村文相の学令引下げ論から考えれば，将来，6才前における早期の読書指導 (early reading instruction) が，国際的な『時』の問題となることが予想される。こうした幼児教育界の動向を念頭において，今までになされてきた読書レディネスの研究のいくつかを概観し，この分野における主要な問題点を指摘し，早期の読書指導との関連において，読書レディネスに関す

る基礎研究の方向づけをすることが本稿の目的である。

II. レディネス一般

学習のいかなる側面にせよ，その側面のレディネスなる用語は，教育の分野では比較的新しいものであるにも拘わらず，この概念の起源は数 100 年前に遡ることができる[5]。

レディネスの概念は，Rousseau の Emile (1762) に起源を発すると言われている。『読むことを必要とされるあらゆることを犠牲にして，読むことを覚えるくらいなら，むしろエミールがぜんぜん読み方を知らないでいた方がましだと私は思っている。ものを読むことが徹底的にきらいになってしまったら，読めたとしても何の役にたつだろう』[84]。

Pestalozzi (1746～1827) も，レディネスの考え方をもっていた。『人間を教えるということは，自然を助けてその独得の働きを益々進行せしむる人間の術に外ならないのである。而して，この術は本来，児童が受ける印象と児童の発展せる力の正確なる程度との間の関係及び調和に基礎を置くものである。教授に依って児童にもたらされる種々なる印象の間には，そこに一定の順序次第というものがなければならないということも必要条件とする。そして，この順序次第が存すればこそ，印象の初めと進みとは，児童の心意中に発展する力の初めと進みと歩調を合わせて行ける筈である』[76]。

J. Dewey はレディネスという語を用いてはいないが，1898年に低学年における言語指導のためのレディネスを論じて，児童の感覚器官や神経組織がこの時期では，まだ読み，書きの学習には最適の状態にないので，このような分析的作業を児童に強要すると，却って，神経組織に障害を加えることになると論じている[5]。

更に，1899 年に G. T. Patrick は，レディネスの問題をとりあげて，児童の精神発達に適した教科課程を編成する学校こそ最良の学校であり，読み，書きは低学年の教科ではないと主張している[5]。

1925 年に米国の全国教育研究学会 (National Society for the Study of Education) の年鑑が公刊されると，読書レディネス (reading readiness) の研究に拍車がかけられ，読書レディネスの問題は明確に認識され，このレディネスの診断法が提唱された。1930 年には E. C. Deputy によって，はじめて読書レディネス・テストの体系的研究が行われ，そのテストが発表された。彼は，このテスト得点が47点以下の児童の 80% が第一学年の読みに失敗するという所見を報告している[31]。

1930年以来，レディネスの実験的研究は益々その数を増したが，Thorndike は，はじめてレディネスの理論的定式化を試みた。即ち，それはレディネスの法則 (law of readiness) であって，彼によると，『結合が活動する準備があるときには，活動することは満足を与え，活動しないことは不満足を与える。活動する準備のない結合が活動するときには不満足を生ずる。』[93] このように，レディネスを身体的成熟を含まない精神的構えとみる考え方は今日もなお行われているもので，レディネスの一つの側面を示すものである。しかしながら，今日用いられているレディネスの用語は，この情緒的レディネス (emotional readiness) 以外に，生理的成熟，一般的な心的能力，経験的背景などが含まれている。

このようなレディネスを規定する要因は，その数何百に及び，その分類は多分に恣意的であるが，近年研究者は共通の根拠を見出し，例えば Cronbach は児童の素質，要求，目標，学習される観念や技能をあげ，Blair et al. は主な要因として，成熟，経験及び情緒的適応を列挙している[5][13]。

第一に成熟であるが，学習のためのレディネスに及ぼす成熟の影響は (1) 経験を削減するか，又は練習を制限するか (2) 早期に練習乃至経験を導入して検討することができる。この成熟の要因とレディネスとの関係に関する研究の多くは動物を用いて行われてきた。

Carmichael の amblystoma の古典的研究を先駆として，幾多の比較実験が行われてきたが，これらの研究から，練習の制限が短期の場合には，殆んど効果がないのに対して，長期に亘ると，永続的に発達障害を生ずることが実証されてきた。上述の二つのレディネスに及ぼす成熟の効果の研究法は動物実験には可能であっても，児童を用いての実験では適用できない。従って，これに最も近いアプローチとして双生児法 (co-twin method) が用いられている[16]。Dennis は，殆んど社会的刺激のない条件下で生後一年間育てられた二人の一卵性双生児を調べて，系統発生的行動が予め定められた順序に従って，自然発生的に起ると主張した。この双生児法は統制群法 (control-group method) を双生児の対に用いた場合であるが，統制群法による研究の一つ M. L. Mattson の研究では，複雑性の異なる三つの迷路の上を球をころがす練習をさせた結果，実験群のほうが，三つの課題においてすぐれた成績を示した[64]。

児童を被験者とする実験では，早期の練習がその後に獲得される機能に影響を及ぼすかどうかが検討されているが，この種族発生的機能では，実験群は統制群よりも

優位を保つことができない。しかし，このことは早期の練習が無駄であるということではなく，泳ぐというような個体発生的行動では練習による変化をうけやすいということである[93]。

以上のことから，成熟が学習のためのレディネスに主要な効果を及ぼすことは明らかであるが，この成熟が学習のためのレディネスにどの程度寄与するかは不明である。勿論，心的発達水準が最低の場合には，レディネスはできていないが，技能や教科の学習に必要な最低の水準はいまだ明らかにされていない。例を読書レディネスにとるならば，D. D. Durrell[26] やよく引用される Morphett[68] 等の研究は，読書開始の至適精神年令を6才半位と推定しているが，読書レディネスの最低年令は，精神年令ばかりでなく，教材や指導法その他の条件からも考察されなければならないので，上述のレディネスの最低年令の決定は困難な問題である。いずれにせよ，精神年令はレディネスの一つの測度としては信頼性の高いものであると言えよう[46]。

レディネスと精神年令との関係についての研究結果はまちまちであるが[26]，最近の研究は特に批判的にレディネスとの関連において，精神発達，身体の発達，運動の発達のような要因を分離しようとしている。例えば，Mulder 等[72] は黙読の成績と発音能力との間に 0.44 の相関を認め，Coleman[12] は知覚の発達の遅れが読書困難と関連あることを観察した。

レディネスを児童の成熟に関連しての作業可能性[43]とみる立場は，手を拱いて児童の知的能力の自然に盲従して，レディネスを神聖にして侵すべからずと考えているが，これは促進し統制できるものに解すべきであろう。レディネスの欠如している場合は，その対策は成熟を待つことではなく，むしろ，これに必要な特別の背景を与えるべきであるという主張を確証するために，Durrell はレディネスが学習される技能と有意な相関をなすことを明らかにしている[26]。

文化的要因も亦レディネスと相関関係にある。レディネスに間接的に作用する経験もある。更には，健康，栄養などの児童の学習のためのレディネスに影響する要因もある。

情緒的要因もレディネスに影響するが，この要因の学習のためのレディネスに及ぼす効果について最も広く認められている考えは，Gates のそれである。即ち読書不能児の $^1/_5$ における情緒的問題は病因論的に重要性をもっているというのである。

Louttit[60] は情緒障害を (1) 学校と読書そのものに対する態度，(2)狭義の情緒，(3)不安のようなパーソナリティ特性に分類しようと試みたが，学習のためのレディネスの欠如に連関のある情緒を惹き起す諸条件としては，同胞間の競争，親の過保護などが考えられている。Monroe は Charles と Tony の事例研究の成功例を引用して，児童の学習能力がいかにそのパーソナリティと関係があるかを例証した[16]。

Rorchach テストその他の技法を用いてのパーソナリティの分析は，硬さ，不安などが学習のためのレディネスと連関あることを示唆している。

学習のためのレディネスに影響する要因は概略以上の通りである。このレディネスは読書レディネス[5]，算術に対するレディネス[9]，就学レディネス (school readiness[48]) などがあるが，玆では就学前の水準における読書レディネス (reading readiness or readiness for reading) について論ずる。

III. 読書レディネス

読書能力の発達は研究者の目的により，又これを分析する立場によって，異なる段階に分類されているが，Harris[40] は読書能力の発達を (1) 前読書期 (pre-reading period), (2) 読書レディネス・プログラム期 (reading readiness program period, (3)読書開始期 (beginning reading period), (4) 独立読書始期 (initial independent reading period), (5) 高次の初等読書期 (advanced primary reading period), (6)過渡期 (transition period), (7) 中級読書期 (intermediate reading period), (8) 成熟読書期 (mature reading stage) の 8 段階に分類している。Monroe[66] はこの前読書期における book behavior を8段階に分け，最後の段階を読書レディネス期 (5 才～6 才半) としている。

読書レディネスは初期にはこの前読書期にかかわるものと考えられたが，現代では読書が学習の手段として用いられる場合には，あらゆる教育水準で取扱われるべきものと解釈されているが，本稿で考察する読書レディネスはこの前読書期におけるレディネスである。

読書は児童が自己の欲求と社会の欲求とを満たすために果さなければならない『発達課題』であって，Havighurst[44] によると，この『発達課題』を立派に成就すれば，その後の課題も成功するが，失敗すると，その後の課題の達成も困難になるという。読書レディネスは一般に読書をするための素質的要因と環境的要因とがととのっている発達段階であると考えられているが，Harris[40] は読書レディネを単一な特性ではなく，多く

の特性の複合体であるとし，これを一般的成熟の状態——この状態に達すれば，過度の困難なく読みの学習ができる——と定義している。このように定義されている読書レディネスはよく歩行との対比において考察されている[18][19]。歩行できるためには，その基礎条件がととのっていなければならない。即ち背骨や下肢が十分に発達していなければならない。倒れないように身体のバランスをとることができなければならない。何の支えもなしに坐り，ものにつかまって立つことができ，更には，支えがなくとも，すこしの間は立っていることができなければならない。一層重要なことは神経組織が成熟していなければならない。このような成熟と学習との交互作用の結果，歩行ができるようになるのである。読書も亦成熟と学習の後に甫めて修得されるが，これは歩行よりも更に複雑な行動である故に，更に高水準の成熟，大脳の発達及び学習が必要条件になる。

この読書レディネスの概念は 1920年～1930 年の時期に形成され，1926 年に国際幼稚園連盟が『第 1 学年入学時における生徒の読書指導のためのレディネス』の研究を行い，1927年にこのレディネスについての最初の論文が Childhood Education 誌に発表され，1928 年に発表された Gray の論文には初めて読書レディネスに関する三つの研究が発表された。1930 年～1940 年の時期には読書レディネスに対する関心は最も強くなり，この論題についての研究は 1940 年に最高に達し，Gray は 1 年間にこの問題に関する研究を 22 も報告した。しかし，その後は研究発表は徐々に減少してきた。未発表の研究については，レディネスについての最初の博士論文が 1927 年に報告され，それ以来，修士論文や博士論文の数は増加し，1937年から 1940 年の間に頂点に達した。しかしながら，それ以降はレディネスについての研究で毎年報告されるものは僅か二，三にすぎない。今日ではこの種の論文の発表は珍しく，この 1930 年～1940 年の時期は読書レディネスの研究が最も旺盛であったと言うことができる[82][83][86]。

この読書レディネスを規定する要因は何であろうか。この要因はその数も多く，複雑である。Smith 等は知覚の発達，知的発達，社会性の発達，情緒の発達など11の要因を列挙し[86]，Harris は年令，性別，知的要因など 8 要因を列挙し[40]，Harrison は知的発達，身体の発達，及びパーソナリティの発達を示し[41]，大西は知能的要因，身体的要因，情緒的・社会的要因，教育的要因を列挙している[75]。しかしながら，読書レディネスの決定子は通常 (1)身体的，(2)知的，(3)社会的及び (4)情緒的の要因に分類されてきた[34]。

以下，この 4 つの要因について述べる。身体的発達は運動能の学習にだけ影響するものと考えられるかも知れないが，実は身体的未成熟は読書を始め，あらゆる学習を阻害する要因なのである。読書は知的過程であると同時に知覚的過程，感覚的過程でもある。従って，読書という知的過程が正しく行われるためには，勿論，発声器官が正常でなければならないし，健康一般がよくなければならない。又視力，聴力が正常でなければならない。読書こそは正に心理・身体的過程であるといえる。この身体的要因には生活年令，性差，知覚的弁別を加える。

生活年令は読書レディネスと殆んど関係がないと一般に考えられているが，1930年頃には読書開始を決める殆んど唯一の基準となっていたために，多数の小学校入学者が読書に失敗し，ひいては，情緒の発達と社会性の発達が阻害されてのである[41]。この読書開始年令は生活年令の立場から検討されたが，次いで精神年令の観点からアプローチされ，Morphett[68] 等や Bigelow[4] は精神年令 6 才半が読書成功の必要不可欠の条件であることを述べている。

身体の成長と読書レディネスとの関係について，Karlin[50] は身体的成熟と読書レディネス・テスト得点との間には関係がなく，骨格の発達とこの得点の間に見出される一定の関係は偶然のものであろうと述べている。

性差については，多くの研究は男児が女児に比べて読書不振が多いことを実証している。例えば，Alden et al.[1] の 2 学年から 6 学年の児童についての研究は男児の 18.6%，女児の 9.8% が読書遅滞児であることを明らかにしている。Monroe[67] も亦 155 名の読書不振児の中，86% が男児であり，残りの 14% が女児であると記している。Gates[30] も 2 学年から 8 学年までの13,000 名余の児童をしらべ，女児が各学年水準につき男児よりも有意に読書成就得点の高いことを報告している。

他方，読書レディネス・テスト得点からみて，男児と女児との間に差がないという所見もあるが，性差を示す証拠は圧倒的に多いようである。

聴覚的弁別と視覚的弁別能力が知覚的発達の主要な要因であることは言を俟たないが，最近の研究はこの能力が読書レディネスと密接な関係にあることを明らかにしている[33][39][58][74][96]。特に低学年の段階では，単語の要素の視知覚並びに聴知覚の指導訓練が読書語彙の学習の成否をにぎる鍵である[39]。

知的要因の中で，一般知能が読書能力の非常に重要な

決定子であることは多くの研究者の力説してきたことである[14][61][94]。

Gunderson[36] の引用によると，Natale は知能と読書レディネスの要因（情報の範囲，関係の知覚，反対語彙，記憶範囲，語の弁別）との関係を検討し，(1)知能と反対語彙，記憶範囲，語の弁別との間の関係が1%水準で有意であるが，他の要因については有意ではないという所見を見出した。McMillan は一学年生100名を2年3か月間調べて，知能と読書レディネスとの間に1%水準で有意な関係があることを実証している。Petty[77] は知能が読書レディネスの極めて重要な決定子であると結論して後に，この2変数の相関が低かったことから，他の要因の重要性をも認める必要のあることを附言している。

多くの研究においては，読書レディネスと知能との関係へのアプローチは精神年令の視点からなされ，この2変数の相関は約 0.35～0.80 の範囲にあることが明らかにされている。読書レディネスの最適な精神年令については Morphett 等[68] が6才半説を提唱したことは前に一言したが，Morphett 等はその研究から，児童が精神年令6才半になる迄，読書指導を延期して，教師が失敗のチャンスをすくなくし，指導の効率をあげることができると結論している。この Morphett の説は読書材料，指導法その他の条件が一定である場合に成立するもので，Gates[29] は条件が変れば，読書に必要な精神年令も変るから，個人差を十分考慮して効果的指導をすれば，精神年令5才で十分であると主張している。Gunderson[36] の引用によると，Durrell も亦この Morphett 説を批判して，精神年令と読書レディネスとの相関が 0.～0.60 の間にあるので，精神年令のみでは読書の成否をきめる指標にはならないと述べている。そして，音声を聞き分ける能力，語彙の習得，注意の持続，再生，想像力，転移能力，動機づけ，高等精神過程なる要因をあげて考察している[26]。

要するに，知能と読書レディネスとの間にある不完全相関は他の要因が作用することを意味するもので，知能以外に特殊能力が読書の成否を左右すると考えられる。Harrison によると[41]，この能力は (1) 異同弁別能力，(2)単語の想起能力，(3)観念の記憶範囲，(4)抽象的思考能力，(5)抽象したものを一定の反応様式と関連づける能力である。

社会的要因については，種々の非社会的行動や反社会的行動が読書不振に随伴する傾向があることは研究の明らかにする所であるが，筆者の知る限りでは，社会的要因と読書レディネスとの関係についての実験的研究は殆んどないようである。読書レディネスにとって意義ある社会的成熟の側面は自立心と集団活動への積極的にして，協同的な参加であると言われている。前者は学校生活への適応の前提条件であり，後者については，学習が集団の中で行われる所から，反社会性や非社会性のために集団活動に参加できず，仲間はずれにされ，従って適切な学習ができないと考えられる。このような社会的成熟の測度と読書レディネスとの関係の実験的研究は今後の課題となるであろう[40]。

最後は，情緒的要因であるが，読書レディネスに関係ある情緒的成熟の一つの側面は情緒的安定の問題である。読書不振児が情緒不安の症候を示すことは屢々観察されているが，就学前の水準における読書レディネスと情緒的成熟との関係についての研究は筆者の利用し得た文献には発見できなかった[67]。

IV. 読書レディネスの評価の問題

読書レディネスが多くの特性の組合せであることは前に指摘してきた所であるが，このレディネスに影響する要因のうちで最も重要なものは一般知能であることから考えると，知能テストが読書レディネスを評価する有力な用具であることは明らかである。

特に読書レディネスの測定を目的とするテストがある。早くも 1930 年に Deputy[34] によって読書レディネス・テストが作成されたことは前に記した。広くアメリカで用いられている読書レディネス・テストには Metropolitan Readiness Test (1933 年)，Monroe Reading Aptitude Tests (1935 年)，Gates Reading Readiness Tests (1935 年)，Lee et al.[57] の作成したテスト (1943年) などがあるが，我国では坂本D式基礎読書力診断テスト (1953年) が標準化されているのみである。

読書レディネス・テストの予測的価値については広く研究されている[34][36][65]。例えば，Karlin は Metropolitan Readiness Test と読書テスト得点との間には 0.36の相関のあることを報告し，読書レディネス・テスト得点から読書テストの成績を予測することが不可能であると述べている[49]。これまで極言しなくとも，読書レディネス・テストの予測的価値は極めて限られ，読書レディネスに於ける児童の欠陥を指摘するのに有用なもので，診断こそこのレディネス・テストの目的であると言えよう。

児童の読書レディネスの評価に教師の評定が用いら

れ，教師の評定の妥当性も研究されてきた。読書レディネスの技法に通暁した経験豊かな教師の評定が標準化されたテストと同じ位，高い予測性があるという結果も報告されている[45][54]。

以上のように読書レディネス・テストの予測性が限られている所から，そのテストと知能テストか教師の評定との併用又は両者との併用によって，読書レディネス・テストの予測性を高められることも示唆されている[27][40][55]。

V. 読書レディネスと早期の読書指導

最近，アメリカでは kindergarten reading controversy[73] が起っているほど，就学前の水準における読書に関心が払われ，一方では，この方面の研究が活発であるとともに，実際面では Denver School や Whitby School などでは，幼稚園児に読書指導を行っている。他方では，一般大衆向きの雑誌[16][69][78]でさえ，この問題をとりあげ，論議紛々たるものがある。この論争が起った要因の一つは幼稚園教育の目的にかかわるものであった。

Froebel (1782～1852) の教育目的は，人も知るように，象徴的であって，子どもに宿っている神性を十分に伸ばすことが教育であると考えられた。この神性は子どもの自己活動を通じて現われ，この活動は子どもの遊びにみられるとした。『遊戯は，喜びや自由や，満足や自己の内外の平安や世界との和合をうみだすのである。あらゆる善の源泉は遊戯の中にあるし，又遊戯から生じてくる。』[28] この子どもの遊戯においてこそ，合自然的な発達をとげるものであり，従って，創造的な遊戯を育てるために恩物を正しい仕方で与えることが重視された。そして，この恩物によって，コスモスの中の関係が体系的に子どもに理解され，この理解が，ひいては，神性を達成する手段と考えられた。

このように，Froebel の幼稚園創始の指導原理は観念論的，浪漫主義的，形而上学的であったが，1870年代に新大陸アメリカに起った幼稚園運動もその理論において形而上学的であり，この運動の目的の規定は明確さをかいていた。しかしながら，児童研究運動の影響をうけ，Dewey (1859～1952) 哲学に対する関心が高まるにつれて，改革運動が1910年～1920年代に抬頭し，幼稚園教育の目的や方法の再評価は避け難いものとなった。この運動は児童の欲求を満たすために，幼稚園のやり方を改めることを目的とした。心理学や実験に対する関心の高まることによって，幼稚園教育のカリキュラムや方法の改定が重要視され，形式主義はプログマティズムに道を譲り，児童が観察・研究されるに従って，その多くの欲求が理解され，これを満たすための新しいプログラムが提唱された。教授法も科学的研究の成果に基いて改定され，小さな積木を排して大筋肉の発達に適した大きな積木が考案され，社会的経験が重要視されるに従って，個人で行う形式的活動から，グループでの活動に重点が移った[97]。

しかしながら，幼稚園では教科の学習は強調されず，当時は勿論のこと，今日でもカリキュラムは空虚な遊戯を内容としているという批判をうけ，特に1957年にソ連によって打ち上げられた人工衛星 Sputnik 以来，現行の学校に批判の矢がむけられた。これに対して，幼稚園でもアカディミックな内容があって，幼児の能力に応じて教えられるという主張がなされた[73]。こうした弁護論の中から，幼児教育関係者自身の側から反省が起り，(1)アカディミックな教科を形式にとらわれずに，幼児自身のペイスに合せての学習と (2) ガイダンスという二つの目標から幼稚園の存在を正当化しようとする動きが窺われる。しかしながら，この可能性に対する疑問から，この kindergarten reading controversy が起っているようである[73]。

幼児の早期読書指導に対する要請の第2の要因は幼児をとりまく環境の変化に伴う幼児における変化が認識されたことであろう。即ち，日常生活のテンポが速くなり，都市生活への傾向がある所から，過去に比べて，幼児が社会的に成熟し，所謂発達の加速現象[42] が認められる。幼児の日常生活は語を始め，種々の記号に満ち，TVの視聴時間が長くなっているので，幼児の眼筋は発達し，それだけ単語のような記号の認知がしやすくなっている[22][62]。

第3の要因は Montessori の教育が3才児，4才児に潜在的に学習能力のあることを示す証拠を提供しているために，この教育に関心が払われたことである[69]。

最後に，第4の要因として考えられることは，学校入学前に家庭で読めるようになった幼児についての研究が発表されて，この幼児の早期読書指導運動を推進するのに貢献したと考えられる[56][78][99][100]。

この早期の読書指導に関する研究は (1) 意図的な指導をうけないのにも拘らず，学令前に読めるようになった児童，(2) 6才以前に意図的に読書指導をうけた児童，(3) 6才未満で入学した児童とそれ以後の年令で入学した児童と比較，(4)読書レディネスの訓練をうけた児童に関する研究に分類できる[63]。

第1の研究に属するものは，Witty & Coomer[99], Witty & Blumenthal[100], Kasdon[52], Durkin[18][19][22][24][25], Moyne[70], Krippner[56], Pleassas & Oakes[79]の研究であるが，就中，Durkin 女史の二つの縦断的研究[18][19][22][24][25]と今行われている Sutton[72] の同じく縦断的研究は有名である。Durkin の二つの研究は (1) 就学前の読書能力を規定する要因と (2) 早期の読書学習の価値を検討するために，5,103 名の1学年生から49名を被験者に選び，一つの研究は 1958 年9月に開始された。被験者は就学前に家庭でよめるようになっていた児童であった。もう一つの研究は 1961 年9月に始められ，被験者は1学年生であった。この両研究は1964年7月に完了した。

この49名からなる実験群の読書成績得点の平均は第1学年の初期では，学年基準によると，2.3 であり，終期では 4.0 であった。第3学年の終りまでには，この実験群の読書成績は 4.4～6.0 で，中央値は 5.0 であったのに対して，統制群 (201 名) のそれは 2.0～6.0 で，中央値は 4.3 であった。この両群を比較すると，知能が低いほど，読書を早期に始めた利点が大きかったばかりでなく，早期における読書指導がその後の成績に悪影響を及ぼさないことがわかった。しかしながら，このことから早期の読書指導をよしとする結論はでてこないことを指摘し，その理由として次の事実を挙げている。この研究の被験者は大部分よめるようになりたい意欲をもち，絶えず文字や単語に好奇心をもち，質問に喜んで答え，更には質問をすることを励ます人がいた。早期によめるようになった児童は自分に興味のある語をよめるようになる機会を与えられた[19][22][24][47]。

第2の範疇には Davidson[14], Keister[53] などの研究がある。特に最近の研究は就学前における読書指導を扱っているものが多い[63]。これらの研究者の意見によると，早期に読書指導をすることは可能でもあり，プラスにもなるというのであるが，幼児に読書の学習能力があることは読書指導をすることが望ましいということにはならない。新しいアプローチの下で，すぐれた成績をあげられることが明確に実証されなければならないからである。

第3の範疇に属する研究は多数行われた。Bigelow の研究によると，6才前に入学した児童でI.Q.が平均以下のものは学業成功の見込は殆んどないという[4]。1920～1930 年代における就学年令と読書成功との関係を明らかにする研究は大部分低学年児童を被験者としたのに対して，Hampleman の研究[38] は第6学年まで延長して，この関係を比較したものである。研究結果は，早く入学した者と遅く入学した者との間には読書成績について有意差はなかったが，これは恐らく被験者数(58名)がすくなかったためであろう。Halliwell 等の研究結果[37] は Bigelow[4] のそれに一致し，早く入学した者は遅れて入学した者よりも有意に学業成績が劣ることを実証した。

第4の範疇に属する研究の一つは，屢々引用される Morphett & Washburne の研究である[68]。この研究の結論は，読書開始の至適精神年令が6才半であるということであったが，その後 Gates[29] はこの6½才説を批判して，読書開始に必要な精神年令が，用いられる材料，指導法，クラスの大きさなどの諸条件によって異なることを明らかにしたことは前にも触れた。Gates に続くその後の研究も精神年令が読書開始の成否を保証する条件ではないことを示している[51]。しかしながら，最近の研究動向はこの Morphett 等の 6½ 才説には挑戦せず，他の側面の研究をしている[96]。

Wilson et al.[98] は幼稚園児の間に語の認知と文字認知との高い部分相関（精神年令の影響をとり除いた）があることを見出し，読書レディネスが現実には読書の進歩 (reading progress) であると主張した。Scott[85] は年度の始めに第1学年の集団を始めたけれども，読書がうまくいかなかった統制群と読書レディネスに要する技能ですぐれた成熟を示した実験群（幼稚園児群）を用い，後者にレディネスの訓練をした。1年後に実験群は統制群に比して一学期の平均学業成績がよく，望ましい態度，習慣などについての教師の評定でも，実験群が高く評価された。しかしながら，この研究結果の統計的信頼性を高めるためには，Scott も指摘しているように，被験者数を更に増加する必要がある。又選ばれた幼稚園児のほうが既にレディネス・テストで測定される技能をもっていたので，レディネスの訓練効果があったとは一義的には決め難い。

Bradley[6] は子供にレディネスができるまで系統的な読書指導をしない場合には，それが子供にプラスになるか，マイナスになるかを検討しようとして，実験群にはレディネスを促進するプログラムを与えて，レディネスができるまで正式な読書指導を延期した。他方，統制群には就学と同時に各教科の指導をした。この研究の結果，第2学年では統制群がすぐれていたが，第3学年末までには両群の間に読書成績に有意差がなかった。

言うまでもなく，初歩の読書を習得するためには視覚的弁別技能が発達していなければならないが，どういう

感覚経験を与えれば，印刷された文字のような複雑な刺激を視覚的に容易に弁別できるかは一つの問題である。Muehl[71] の研究はこの問題を解明するために刺激予備訓練の研究 (stimulus pretraining research)に用いられる実験手続を適用したものである。まず，予備訓練では刺激として後の学習課題で用いられる語彙にあるのと同じ語 (Group S)，それと異なる語 (Group D)，幾何図形 (Group F) が用いられ，被験者（幼稚園児 37 名）を 3 群に分け，この異なる予備訓練を与えた。学習課題では全被験者は12回試行し，対連合法が用いられた。分散分析の結果，予備訓練の型によって学習作業が有意に ($P<0.05$) 影響されることが判明した。換言すれば，語の視覚的弁別の予備訓練をすると，他の語や関係のない文字の予備訓練の場合よりも，幼稚園児の語の認知が容易になった。Staats et al.[89] も Muehl と同じ結果を得ている。

以上は幼児の早期読書指導 (early reading instruction) に関する研究動向であるが，この early reading instruction の中には，ソ連の人工衛星の打上げに伴う "Let's have more and let's have it sooner" という教育に対する要請が著しく反映し，読書指導が嘗てない重要性をもった問題になってきた。この早期の読書指導をよしとする人々は，読書を他のすべての成長ときり離して，一つの成長と考えているが，読書は児童の全体の成長発達の一つの統合的側面であって，身体的，精神的，情緒的，社会的に成熟していなければ，十分な読書の発達は期待できない。先にも触れたように，現代の読書レディネスを身体的，精神的，社会的，心理的諸要因の組合されたものと解しているので，レディネスを無視して，読書指導だけを強要することには問題がある。

次に早期指導論者の読書過程についての考え方が余りに単純すぎるのである。文字や語を音声化できれば，それで幼児が読書できると考えているが，読書過程は複雑なもので，Smith 等[86] は読書の 8 つの側面が相互に関係していて，読書過程の複雑であることを示唆している。そして読書の核心は読解であるので，内容の意味について考えることを教えることが重要になってくる。

第 3 に，読書能力の個人差を全く無視して，幼児はすべて読みの学習ができると考えているが，早期に読めるようになった児童についての研究から言えることは，これらの児童が次に挙げる特徴をもっていたということである。即ち (1) 知能が高い。(2) 親の社会経済的地位が高い。(3)子どものまわりに文字や語についての質問に応じてくれる人がいた。

しかしながら，大部分の子どもはこのような恵まれた条件をもっていないので，幼児全体に組織的な読書を指導することは，個人差を無視したものである[88][92]。従って，幼児期における読書指導は個人差に応じたものにする必要がある訳で，まだレディネスのできていない幼児に対しては，読書レディネスを促進するプログラムを与えるべきである[36][66]。他方，レディネスのできている幼児には，その能力，興味，欲求などに即応した個別指導を行うべきであろう[2][10][17][35][40][51][66][90]。この場合には，読書に対する興味を育てるように行うべきであり，個別指導を早期に行った場合にすぐれた成果があがったことが実証されて甫めて幼児に早期読書指導がなさるべきで，この基礎研究が必要とされる。

VI. 読書レディネス研究の問題点と研究方向

読書レディネスに関する最近の動向は，大部分の研究が Morphett 等の $6\frac{1}{2}$ 才説には挑戦せず，寧ろ成熟の基準の意味を強調し，読書に必要な身体的発達，視・聴覚的能力，知能，言語を研究してきた[96]。

このような読書レディネスの研究はその問題点をもっているにも拘らず，過去数 10 年間に完成されてきたので，同じ土壌を掘り返すことには意味がないが，最近の早期読書指導 (early reading instruction) に関する研究を更に確固たる基礎の上に据えるためには，読書レディネスにおける既に開拓された分野の問題点を指摘すると同時に新しい領域を探求することも必要であるように思われる。

まず第 1 に読書レディネスの研究の多くについて指摘できることは，標本の大きさが小さすぎることである。従ってこの種の研究結果の一般化には制約がある。

第 2 に考えられることは，いくつかの実験変数を導入した条件分析的実験がすくないことである。この点，刺激予備訓練手続に用いられる実験手続を適用した Muehl の研究[7] はこの方向に沿った研究で，実験心理学の技法の適用は実り多い結果をもたらすかも知れないと思われる。

第 3 に，読書レディネスは多くの関連ある特性の複合体であると言われているにも拘らず，一変数実験がこの領域の研究に多く，多変数実験的研究は筆者の知る限りでは，英国の Potts[80] の研究を除いては皆無に近い。5 つのテストからなるテスト・バッテリーと語彙テスト並びに 3 つの評価の因子分析を行い，g因子，maturity schooling 因子，phonic reading 因子を抽出した。言うまでもなく，因子分析法では，独立変数も従属変数も

なく，すべての変数を同じように取扱い，明らかにしようとする領域について，種々の視点から変数を選び，この変数間の関係を問題にし，この関係をその変数よりも少ない共通因子で説明しようとするものであるから，この技法は読書レディネスの研究に有効であると考えられる。蓋し読書レディネスを理解するためには，種々の角度からのみならず，その相互関係からも考察しなければならないと考えられるからである。

第4に，いまだ研究されていない領域がある。社会性の発達や情緒の発達と読書レディネスとの関係を明らかにせんとする研究は筆者の知る限りでは，少いようである。これはこれらの発達の側面の測定が困難であるためであろう。社会性の発達は社会化と社会的視野の拡大の二つの側面に分けられるので，この側面の測度を用いての研究は興味深いと思われる。例えばソシオメトリーを用いての研究が考えられる。又言語の発達，特に語彙，文構造の習得，発音の明瞭さは読書レディネスに本質的な要因と一般に考えられているので，隣接科学，例えば言語科学の方法の応用は一つの有力なアプローチになるものと考えられる。又読書レディネスの性差は今後研究に値する領域である。性別を除いた他の変数について均質な男女両群を作る実験計画に基く研究は今後必要な研究であろう。

第5に，読書レディネス・テストの予測性を高める問題がある。このテストの予測的価値を高めるために，読書レディネス・テスト又は教師の評定との併用が提唱されているが，このような単なる併用によるのではなく，予測的価値を高めるためには，かなり独自性をもつか，又は一義的と思われるようなテストからなるテスト・バッテリーを作り，その各々のテストに最も適した重みづけをして，適当に組合わせた合成テストを作成しなければならない。この目的のために，例えば重相関法が用いられる。こういう観点に立脚した読書レディネス・テストの作成は筆者の入手し得た文献からは見出し得なかった。この面からの研究は必要である。

第6に，読書レディネスの訓練の効果の研究は今後の探求すべき領域である。厳密な統制条件の下で多数の被験者（Scott の研究[85]に用いられた被験者は40名たらずであった）を用いて縦断的研究をし，読書レディネス・プログラム編成に資すをことができると考えられる。このプログラムに用いられる教材の研究は我国では殆んど行われていないので，外国の研究を参考にして，この方向の研究を試みる必要がある。

第7に，早く読書指導をうけた児童と遅く指導をうけた児童の比較研究の問題である。読書開始の年令や発達段階について決定的証拠をうるためには比較研究をする必要がある。即ち等質な被験者多数を異なる年令で読書を開始させ，縦断的に数年間に亘ってこの被験者を追跡する必要がある。Durkin[18][19][22][24][25]の研究はこの方向に沿った研究であるが，被験者数が少数であり且つ等質な標本ではない点がこの研究の欠陥であろう。

VII. 結　　語

以上，早期読書指導の問題にも言及して，就学前の水準における読書レディネスの研究を素描し，その主要な問題点並びに今後の研究課題・方向を示唆してきた。これは我国の幼児教育において殆んど未踏の読書教育に関する基礎研究を行うために外ならない。以上の論述は十分なものではないが，筆者は第三の問題として指摘した読書レディネスに関する多変数的実験に特に関心をもっている。蓋し，この種の研究は読書レディネスの本質についての理解を深め，幼児のための読書レディネス・プログラムの作成に資するところがあると考えられるからである。次の機会には実証的研究を報告する予定である。

VIII. REFERENCES

1) Alden, C. L. et al., The frequency of special reading disabilities, Education, 62, 1941, 32-36.
2) Appleton, E., Kindergarteners pace themselves in reading, Elementary School Journal, 64, 1964, 248-252.
3) Balow, I. H., Sex differences in first grade reading, Elementary English, 40, 1963, 303-306.
4) Bigelow, E., School progress of underage children, Elementary School Journal, 35, 1934, 186-192.
5) Blair, G. M. & R. S. Jones, Readiness, 1081-1086, Encyclopedia of Educational Research, C. W. Harris (Ed.), New York: Macmillan Co., 1960.
6) Bradley, B. E., An experimental study of the readiness approach to reading, Elementary School Journal, 56, 1956, 262-267.
7) Bruner, J. S., The process of education, New York: Alfred A. Knopf, Inc. and Random House, Inc., 1963.
8) ブルーナー・橋爪訳「デューイの後に来るもの」アメリカーナ誌，1962年2月号
9) Buswell, G. T., Arithmetic, 63-77, Encyclopedia of Educational Research, C. W. Harris (Ed.), 3rd Edition, New York: Macmillan Co., 1960.
10) Cadenhead, K., A plan for individualizing

reading instruction, Elementary English, 37, 1960, 260-262, 268.
11) Church, M., Kindergarten— Education or babysitting? Elementary School Journal, 64, 1963, 18-23.
12) Coleman, J. C., Perceptual retardation in reading disability cases, Journal of Educational Psychology, 44, 1953, 497-500.
13) Cronbach, L. J., Educational Psychology, New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1963.
14) Davidson, H. P., An experimental study of bright, average and dull children at the four-year mental level, Genetic Psychology Monographs, 9, 1931, 119-290.
15) Dennis, W., Infant development under conditions of restricted practice and of minimum social stimulation, Genetic Psychology Monographs, 23, 1941, 143-191.
16) Doman, G. et al., You can teach your baby to read, Ladies Home Journal, 63, 1963, 20-23.
17) Duker, S., Master's studies of individualized reading, Elementary English, 40, 1963, 280-282.
18) Durkin, D., Children who learned to read at home, Elementary School Journal, 62, 1961, 14-18.
19) Durkin, D., Children who read before grade one, Reading Teacher, 14, 1961, 163-166.
20) Durkin, D., Tn earlier start in reading? Elementary School Journal, 63, 1962, 146-151.
21) Durkin, D., Kindergarten and reading, Elementary English, 39, 1962, 274-276.
22) Durkin, D., Children who read before grade 1: A second study, Elementary School Journal, 64, 1963, 143-148.
23) Durkin, D., Should the very young be taught to read? NEA Journal, 52, 1963, 20-24.
24) Durkin, D., A fifth-year report on the achievement of early readers, Elementary School Journal, 65, 1964, 76-80.
25) Durkin, D., Early readers— Reflections after six years of research, Reading Teacher, 17, 1964, 3-7.
26) Durrell, D. D., Learning difficulties among children of normal intelligence, Elementary School Journal, 55, 1954, 201-208.
27) Fendrick, P. & C. A. McGlade, A validation of two prognostic tests of reading aptitude, Elementary School Journal, 39, 1938, 187-194.
28) フレーベル 荒井訳「人間の教育」(上), (下) 岩波文庫, 昭和49年
29) Gates, A. I., The necessary mental age for beginning reading, Elementary School Journal, 37, 1937, 497-508.
30) Gates, A. I., Sex differences in reading ability, Elementary School Journal, 61, 1961, 431-434.
31) Gates, A. I., The improvement of reading, New York: Macmillan Co., 1962.
32) Georgiady, N. P. et al., To read or not read in kindergarten, Elementary School Journal, 65, 1965, 306-311.
33) Gravel, S. R., June reading achievements of first-grade children, Journal of Education, 140, 1958, 37-43.
34) Gray, W. S., The teaching of reading, 1114-1135, Encyclopedia of Educational Research, C. W. Harris (Ed.), 3rd Edition, New York: Macmillan Co., 1960.
35) Groff, P., Comparisons of individualized and ability-grouping approaches as to reading achievement, Elementary English, 40, 1963, 258-264, 276.
36) Gunderson, D. V., Research in reading readiness, Washington, D. C.: U. S. Government Printing Office, 1963.
37) Halliwell, J. W. & B. W. Stein, A comparison of the achievement of early and late school starters in reading related and non-reading related areas in fourth and fifth grades, Elementary English, 41, 1964, 631-639.
38) Hampleman, R. S., A study of the comparative reading achievement of early and late school starters, Elementary English, 36, 1959, 331-334.
39) Harrington, S. M. J. & D. D. Durrell, Mental maturity versus perception abilities in primary reading, Journal of Educational Psychology, 46, 1955, 375-380.
40) Harris, A. J., How to increase reading ability, London: Longmans, 1961.
41) Harrison, M. L., Reading readiness, Cambridge: Houghton Mifflin Co., 1936 & 1939.
42) 波多野他編 児童心理学ハンドブック 金子書房 昭和34年
43) 波多野完治 人間の成長と学習 現代教育学 (2) 岩波書店 昭和37年
44) ハヴイガースト 荘司訳 人間の発達課題と教育 牧書店 昭和33年
45) Henig, M. S., Predictive value of a reading-readiness test and of teachers' forecasts, Elementary School Journal, 50, 1949, 41-46.
46) Hobson, J. R., Mental age as a workable criterion for school admission, Elementary School Journal, 48, 1948, 312-321.
47) Holmes, J. A. & H. Singer, Theoretical models and trends toward more basic research in reading, Review of Educational Research, 34, 1964, 127-155.
48) Johansson, B. A., Criteria of school readiness, Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1965.

49) Karlin, R., The prediction of reading and reading-readiness tests, Elementary English, 34, 1957, 320-322.
50) Karlin, R., Physical growth and success in undertaking beginning reading, Journal of Educational Research, 51, 1957, 191-201.
51) Karlin, R., Research in reading, Elementary English, 37, 1960, 177-183.
52) Kasdon, L. M., Early reading background of some superior readers among college freshmen, Journal of Educational Research, 52, 1958, 151-153.
53) Keister, B. V., Reading skills acquired by five-year-old children, Elementary School Journal, 41, 1941, 587-596.
54) Kermoian, S. B., Teacher appraisal of first grade readiness, Elementary English, 39, 1962, 196-201.
55) Kottmeyer, W., Readiness for reading, Elementary English, 24, 1947, 355-366.
56) Krippner, S., The boy who read at 18 months, Exceptional Children, 30, 1963, 105-109.
57) Lee, J. M. et al., Measuring reading readiness, Elementary School Journal, 34, 1934, 656-666.
58) Linchan, E. B., Early instruction in letter names and sounds as related to success in beginning reading, Journal of Education, 140, 1958, 44-48.
59) Lindgren, H. C., Educational Psychology in the classroom, Tokyo: Charles E. Tuttle Co., 1960.
60) Louttit, C. M., Emotional factors in reading disabilities: Diagnostic problems, Elementary School Journal, 56, 1955, 68-72.
61) Manolakes, G. & W. D. Sheldon, The relationship between reading-test scores and language factors intelligence quotients, Elementary School Journal, 55, 1955, 346-350.
62) Mason, G. E., Children learn words from commercial TV, Elementary School Journal, 65, 1965, 318-320.
63) Mason. G. E. & N. J. Prater, Early reading and reading instruction, Elementary English, 63, 1966, 483-488, 527.
64) Mattson, M. L., The relation between the complexity of the habit to be acquired and the form of the learning curve in young children, Genetic Psychology Monographs, 13, 1933, 299-398.
65) Mitchell, B. C., The metropolitan readiness tests as predictors of first-grade achievement, Educational & Psychological Measurement, 22, 1962, 765-772.
66) Monroe, M., Growing into reading, New York; Scott, Foresman & Co., 1951.
67) Monroe, M., Children who cannot read, Chicago: University of Chicago Press, 1958.
68) Morphett, M. V. & C. Washburne, When should children begin to read? Elementary School Journal, 31, 1931, 496-503.
69) Morris, J. A., Can our children learn faster? Saturday Evening Post, 243, 1961, 17-24.
70) Moyne, L., An individual study of the reading acceleration of two kindergarten children, Elementary English, 40, 1963, 406-408.
71) Muehl, S., The effects of visual discrimination pretraining on learning to read a vocabulary list in kindergarten children, Journal of Educational Psychology, 51, 1960, 217-221.
72) Mulder, R. L. & J. T. Curtin, Vocal phonic ability and silent-reading achievement: A first report, Elementary School Journal, 56, 1955, 121-123.
73) Newman, R. E., The kindergarten reading controversy, Elementary English, 63, 1966, 235-239, 298.
74) Nila, S. M. O. S. F., Foundations of a successful reading program, Education, 75, 1955, 543-555.
75) 大西誠一郎 著 レディネス 国語学習の心理 金子書房 昭和34年
76) ペスタロッチ 田制訳 ゲルトルードは如何にその子を教えうるか。春秋社 昭和2年
77) Petty, M. C., An experimental study of certain factors influencing reading readiness, Journal of Educational Psychology, 30, 1939, 215-230.
78) Pines, M., How three year olds teach themselves to read and love it, Harpers Magazine, 227, 1963, 58-64.
79) Plessas, G. P. & P. O. Clifton, Pre-reading experiences of selected early readers, Reading Teacher, 17, 1964, 241-245.
80) Potts, E., A factorial study of the relationships between the child's vocabulary and his reading progress at the infants' stage, British Journal of Educational Psychology, 30, 1960, 84-86.
81) Redmount, R. S., Description and education of a corrective program for reading disabilities, Journal of Educational psychology, 39, 1948, 347-458.
82) Robinson, H. M., Summary of investigations relating to reading July 1, 1961 to June 30, 1962, Reading Teacher, 16, 1963, 285-322.
83) Robinson, H. M., Summary of investigations relating to reading July 1, 1962 to June 30, 1963, Reading Teacher, 17, 1964, 326-392.
84) ルソー 今野訳 エミール (上) 岩波文庫 昭和

38年
85) Scott, C. W., An evaluation of training in readiness classes, Elementary School Journal, 48, 1947, 26-32.
86) Smith, H. P. & E. V. Dechant, Psychology in teaching reading, Englewood Cliffs: Prentice-Hall, Inc., 1962.
87) Smith, N. B., What have we accomplished in reading?——A review of the past fifty years, Elementary English, 38, 1961, 141-150.
88) Smith, N. B., Early reading: Viewpoints, Childhood Education, 41, 1965, 229-241.
89) Staats, C. K. et al., The effects of discrimination pretraining on textual behavior, Journal of Educational Psychology, 53, 1962, 32-37.
90) Stuart, A., Individualized reading, Elementary English, 37, 1960, 256-249.
91) Sutton, M. H., Listen to the little ones. Elementary School Journal, 64, 1964, 297-300.
92) Sutton, M. H., Readiness for reading at the kindergarten level, Reading Teacher, 17, 1964, 234-239.
93) 辰野千寿著 学習心理学 金子書房 昭和37年
94) Tinker, M. A., Diagnostic and remedial reading, I, Elementary School Journal, 33, 1932, 293-306.
95) Townsend, A., Readiness for beginning reading, Reading Teacher, 16, 1962, 267-270, 276.
96) Wepman, J. M., Auditory discrimination, speech, and reading, Elementary School Journal, 60, 1960, 325-333.
97) Wills, C. D. & W. H. Stegeman, Living in the kindergarten, New York: Follett Publishing Co., 1957.
98) Wilson, F. T. et al., Reading progress in kindergarten and primary grades, Elementary School Journal, 38, 1938, 442-449.
99) Witty, P. & A. Coomer, A case study of gifted twin boys, Exceptional Children, 22, 1955, 104-108, 124-125.
100) Witty, P & R. Blementhal, The language development of an exceptional gifted pupil, Elementary English, 34, 1957, 214-217.